

# ラ・サール生物部短報

1963 6月 No 1

## 一 創報に際して —

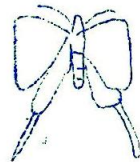
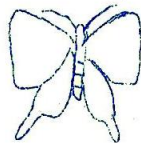
昨年、わが生物部の活動状況や、研究の成果を発表する為、部誌の発行の計画があった、しかし、予算の事などで終に実現できなかった。本年こそばと思っていたが、予算が少いので実現し得ない。それでその代りに、小さいけれども短報を出すことになった。この短報によってより多くの人に生物の存在を知ってもらいたいと思う。これを土台にして並いうちに本当の部誌を発行したいと思っている。(2A 久本野)

一号はいろいろ都合もあって、私(久本野)が一入で担当することになった。今後は何人かの協同執筆として発行するつもりである。内容もただ発表等だけでなく、バラエティーに豊かだ。おもしろいものがあるように心がけたい。

発行予定はだいたい月一回を基本とし、その他変わったことがあった時には、そのつと発行するつもりである。

ガリ版発行なので、見苦しい点や、まちかった所もでてくると思うが、その旨はおゆるし願います。

63. 6月



オ一号として、私はモニシロキョウの葉に一ついていろいろ書こうと思う。モニシロキョウといへば、私達にとってもっともなじみの深い蝶である。しかしなじみが深いからといって、"オスとメスはどこがちかうのか"、"1年ほどのように発生するが、等と聞かれるととまどう人も多いと思う。現にこの私も少しとまといがちなのである。それで、以下に、本を参考にした。又私の少い体験をもとにしてモニシロキョウの事を書いてみた。未熟な私なのでまちがいがありましたらごしとし注意して下さい。

(1) モニシロキョウ *Pieris rapae crucifera* Boisduval

モニシロキョウというのは、白いキョウに黒い紋があるところから来たのである。

① 分布

日本各地に普通である。

② 幼虫の食草

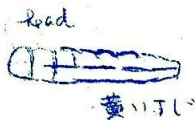
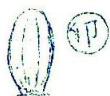
ハダサオ、ツルタカラシ、カラシナ、クワ、キハツ、ダイコン、ロウカ、アブラなどの種々のアブラ科植物。その他フウキョウソウ科植物も食する。

③ 卵

卵は主として食草の葉の下へ一組ずつつけられる。アブラ科のホーシロウにはぞ長く、末に何本かのすじがある。径は0.4mm、高は0.8mm位である。ハグサイ等のうらまを見ると、白みかかった卵と黄みかかった卵があるが、白みのほうみだてのもので、黄みのは生んでしばらくたつたものである。卵は多くとも1週間ほどで孵化する。

④ 幼虫

幼虫は孵化したてのころは、茶色か灰色をしている。大きくなるにつれて、みどり色になってくる。そしてせうに黄緑色の線かててくる。身体には細かい毛がたくさん生えている。幼虫は毎日毎日終命では3cmに少し足りないぐらいの大きさである。命数は5命までなる。その他特ちょうはあるかぼろく。



### ③ 蛹

体長 21~22mm 位で、色は 緑~灰色などあるが、これは蛹化した場所によってちがうそうである。蛹化する場所はいろいろで、草のかけや、かまのの木など種々である。

### ④ 発生経過

越冬能は蛹で(暖地では幼虫のこともある) 暖地では 5~6回 寒地では 2~3回の発生。

以上は主に本を参考にして書いたが、以下私の体験と鹿児島県内のことに少しおいてみると思う。思いつくすりに書いたので序が悪いかもしれません。

### ① 虫と卵の見わけ方

1 は人確實なのは、交尾器によって見わけることである。しかし一歩人にメスは虫よりも色が黒っぽりから容易に見わけられる。

### ② 寄生

モニ三口千ヨウの幼虫、俗にいうアムミは野菜の害虫である。だから当然というわけでもないが天敵がいる。ハクサイや、キャベツの葉をめぐって幼虫を観察すると時々、幼虫の子わりに極白か黄色の小さい粒がついていることがある。あれは寄生バチのオユである。「鹿児島県の蝶類」には、寄生バチの一つとして アムミゴマユバチという名がみかっている。その他にも寄生バチもあるそうである。だからもし幼虫をとって育て飼育するときは注意しなければいけない。寄生バチは幼虫を生かしながらその体の中をむさぼりくっているのである。幼虫は虫さたしかはねとなるのである。

### ③ 訪花植物

虫自身、モニ三口千ヨウが花をおとすのは何度も見たが、その名ははっきりおぼえていない。しかし春の菜の花だけは印象がふかい。以下は「鹿児島県の蝶類」のほうすいである。

・スミシ、・アブラナ、・キャベツ、・ハクサイ、・タケノコ、・カタバミ

・グローバ。ネズミモチ。ハナ。

※私の記憶にあるもの

・野バラ。マキハブラシ。ミヤコグサ。ヨメナ。アサギ

○ 発生

鹿児島島に於ける発生について調べてみると、鹿児島島では、この蝶の発生は少ないといわれてもよい。もっとも県北部では古くから発生している。私自身1961年1月3日に谷山市で数頭のモノミロキョウを見た。南部に行けばもっとみられるだろう。しかしこの蝶が多いのは十ノハチの咲くころで、この花がさくのと同時に目だつて多くの蝶がみられる。しかし十ノハチが落ちると一時例年より少くなる(鹿児島市での観察)そしてその後からしばらくは多くなり、何回も発生をくり返すようである。しかし夏の7~8月は数日ずつのように思われる。そして9~10月にかけて又多くなる。その発生は又少くなるので、このように見れば発生はないと言っても、その発生には誤りがあるわけでは、又一年の確実な発生経過は合っていない。

○ 渡りについて

この蝶は集団となって渡りを行なう蝶としても有名である。県外のことばかり知らない。県内のことについて述べる。以下は「鹿児島島の蝶類」の抜粋である。

※ 渡りについて気付いた点

- ① 時期は5月 1時半で最も数の多い朝
- ② "さわやかならぬ晴れ、のどかたし、ふゆにおとす山"という歌の日
- ③ 早合ともする
- ④ おり風にごからぬ、むしろさわやかな風のため海面が30m以内の所を相対り数と成るといふ
- ⑤ 海上だけでみられて陸上ではみられない
- ⑥ 渡って来た所に大群をなるといふことはない
- ⑦

○ 私も魚つりに行った人から時々海上で渡りに出た。たしいうことを聞いたことがあるがよくおぼえていない。又去る5月半旬ごろ、雨がふかった時、下く、人のモノミロキョウ蝶がラサールの校庭にとぶのが見られた。これも

渡りだつたかも知れない。又この渡りは県内では鹿児島  
島湾に於て多く見られる北より南への移動の記録はなく常  
に北上するのほおもしろいとたと思ふ。今後ゆたりま  
ぞ見したら、その時の状況などをお知らせ下さい。

### ・飼育

この蝶の飼育はとてむやみしいので、興味のある人は  
せひやるべきである。卵はやさいの植えてある畑など  
にいつて菜のうらまめくると大ていみつかる。幼虫から  
やる人は、寄生バチのついたのは気をつけなければな  
らぬ。寄生バチのついた虫の飼育もおもしろいので  
一因ぐらいはやってみるとよい。

容器の中へ食草を入れた卵をに入れてかうとよい。幼虫の  
えさは、新鮮にして、フコにはカでかつかめよう清潔に  
しておくべきである。蛹になる時は容器のまわりなどに  
行くか、蛹になる前に何か適当な木切れなどを入れてやる  
のもよい。卵より羽化するで1ヶ月と少し位である。羽化  
する時、蛹は適当な大きさの容器で羽化させないと羽  
かひさぬのでためである。その時も羽化直後の成虫  
かつかまるものをに入れてやるとよい。要するに清潔に  
してやると大ていは成功するものである。

### ◎その他

・私の記憶によると、この蝶を人工のエサでかつたという  
記録をよんだことがある。しかし、キャベツの成分を人工で作  
って飼つたそうである。いくら成功したそうでも、人工に  
かにかつてもらいたい実験である。

### ・モンシロチョウの寝場所

今まで観察した所では、大ていは草の裏などである。  
朝早く野原を歩くと、眠っているモンシロチョウに出あ  
うことがあるので、注意するとよい。

・モンシロチョウの交尾の際、メスが下かメスか下になるか  
等もおもしろいテーマだと思ふ。観察したら知らせ  
下さい。

以上が芥一号のモニミロキョウに7.5の記号で写し以後  
よりよいものを書き下しと思っております。

(k.k)

